
世界ハカクモ美シク

palm

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界ハカクモ美シク

【Nコード】

N1731Z

【作者名】

palm

【あらすじ】

勇者がいるから、魔王を討てる。魔王がいるから、勇者は現れる。勇者は世界に平和をもたらす。魔王は世界を恐怖に陥れる。それは当たり前で、当然の世の理だった。そして、この世界にもまた一人の勇者と一人の魔王が、時代の節目に現れていた。これは、世界を救った一人の勇者のその後の物語である。

最終的に立場が逆転したプロローグ（前書き）

ストックなんてありません。ノリとテンションで書き、更新します。
なので、一話の長さは短いですが、マメに更新したいと思います。

最終的に立場が逆転したプロローグ

「いいか、魔王というのはだな」

「……………」

俺の目の前には、自称勇者がいる。否、自称ではない。この世界で唯一人の勇者である証、『勇者剣ライトエンド』を腰に携えているのだから。

「こういう場面だったらあれだ、『貴様に世界の半分をくれてやる』とか言って勇者の信念を意味無く鈍らせようとするのがセオリーじゃないか」

女が勇者というのは珍しいが、文献によると決してなかったことではないので問題ない。

問題があるとしたら。

「そこで私がこう言うんだ。『むしろ全部寄せ』ってな。やっぱ一人で一から世界征服するのはメンドイし、かといって世界は欲しいで大変なんだぞ、私も。つーか魔王。アンタ世界征服するの遅すぎ。いつになったら進行してくんだよ。だからこうして私がわざわざ来てやったつてのに、『よく来たな勇者よ。最後の決戦を始めようか』は無いわー。何が最後の決戦よ。中ボスもないし、城の中にモンスターはほとんどいないし、なんだ？ もしかして魔族って人手不足なのか？」

勇者のこの性格だ。

だいたい、今の俺達の位置関係だっておかしい。俺の知る魔王と

勇者の関係なら、魔王が玉座に座って勇者を見下ろすのがセオリーだ。

なのにこの勇者は、俺が、勇者が城に開けた穴の補修作業に行っている間に俺が座るはずの玉座に座っていた。足を組んで、銅に入った格好で。

え、何この勇者。魔王よりよっぽど勝手なんだけど。

「聞いてんのかよ、魔王さんよー」

「……うむ」

そして、何故俺は勇者から『魔王について』を語られているのだろうか。

俺は教えられた通り、一匹狼で強い孤高の王者を演じていたというのに。

「だいたいアンタは魔王っぽくねーんだよ。この前の戦いん時だつて、モンスターのピンチに颯爽と駆けつけて何処のヒーローだったーんだよ」

「いや、しかしそれは上に立つ者として当然の……」

「甘い。甘すぎるよ魔王。駒は使ってなんぼ。使い捨てが常套手段だろーが」

「ただでさえ少ない魔族の同胞を助けることが、それほどおかしなことか？」

人間と比べれば能力は高いが、繁殖力の乏しい我が一族の仲間達を救いたいと思うのは当然のことだと思う。

「んなもん世界征服してから産んで増やしていけばいいんじゃないか」

「死んだ者は二度と戻らない」

「なら、大切なやつは大事に守っとくんだな」

「……俺にとって、魔族みんなが家族で、大切な人だ」

「ハッ！ 家族？ あのモンスターがか？」

「そっだ」

小さな頃からこの城で共に暮らしてきた、かけがえの無い家族だ。

「いいねアンタ。気に入ったよ」

勇者はニヤリと笑うと、玉座から立ち上がる。

「……悪いが、俺はお前が気に入らない」

腰から『魔刀ダークエンド』を抜き、構える。

「ハハハッ！ いいねえ。やっぱりラストバトルでは殺気ぐらい込められてないかねー！」

応じるように、勇者も『勇者剣ライトエンド』を抜く。

「……俺は、家族を守って見せる！」

「来な、魔王！ お前を倒して、私が世界を手に入れてやるよ！」

こうして。

世界を守る勇者と、世界を滅ぼさんとする魔王との最終決戦の火蓋がきって落とされた。

何がどうしてこうなった的な第一話(前書き)

短い。その一言に尽きます。

何がどうしてこつなつた的な第一話

「……で、魔王様？ これはいったいどういうことなんですか？」

朝食の席。無駄に長くデカイ机の上に並べられた料理に手をつける前に、猫又のマイアメイド長が頭に怒りマークを幾つかくっつけながら質問してきた。

「……なにか問題が？」

「大有りです！」

毛を立たせながら怒りを体で表現するマイア。黒髪のおかつぱ頭に色白の肌。顔も整っていてスタイルもいい。だが、いかんせん真面目すぎるくらいがあるのがたまに傷だ。

「何故、勇者が、魔王様の城で、朝食をのんきに食ってるんですか
——！！！！？」

だから、そんなどうでもいいことを気にする。

「……友情だ」

「え……？」

「俺と勇者は、友情と言う絆で繋がった友だ。友を朝食に招いて何が悪い」

「……あのー魔王様？」

「なんだ」

「たしか昨日までしてましたよね？ 魔王様と勇者の決戦」

「ああ」

流石は勇者だった。一週間の間、俺の攻撃を凌ぐとはな。

「魔王様、ものすごく怒ってませんでした？ 人質を取られたり、城を破壊されたりで」

「ああ。だが、城は直してくれた。人質は元から傷付ける気はなかったらしい」

早とちりってやつだな。俺もまだまだ魔王としての修行が足りない。

「嘘に決まってるじゃないですか！ あの時の勇者のあの悪どい笑みを見なかつたんですか!？」

「オイオイ、黙って聞いてたらまたずいぶん酷い言い草じゃないか、ネコさんよー」

「……悪いな、シャイナ。家のメイドが気に障ったことを言ったら俺を殴ってくれ」

部下の責任は俺の責任だ。

「ま、魔王様……」

「いや、別にいいよ。間違ったこと言ったわけじゃねーし。そんなわりさ、アウル。私がもうちょいここにいること認めてくれるか？」

「ああ、お安いご用だ。部屋は昨日と同じでいいか？」

「オツケー」

そう言っただけでシャイナは食堂を機嫌良さげに出ていった。見ると、机の上にあつた食事はほとんど平らげられていた。

「……は！ 然り気無く話をそらされて、滞在期間伸ばされました！ というか、いつの間に魔王様と名前交換を！？」

横で「あの悪女め……」と呟いているマイアに新しい食事の準備を頼んで、俺は椅子に座る。

開いた窓から聞こえるワイバーンの鳴き声は、今日も新しい朝が来たことを感じさせてくれる。

「いい天気だ……」

世界は今日も美しい。

何がどうしてこうなった的な第一話（後書き）

マイア

「皆さん、初めまして。魔王様の下でメイド長をやらせてもらっている猫又のマイアです」

アウル

「俺はマイアの主。魔王のアウルだ」

マイア

「さて、魔王様。次回予告らしいですがどうしましょう」

アウル

「ふ、そんなものは決まっている。魔王らしく、次回予告をするのみだ」

マイア

「魔王らしい次回予告がどういうものかは判りませんが、流石です魔王様」

アウル

「次回。俺と勇者に芽生えた友情。そこから始まる、魔族と人間の歩み寄り。そうして世界は勇者の名の下に平和へと進み出す」

マイア

「実際は勇者による勇者の為の世界征服ですが」

アウル

「世界ハカクモ美シク第二話、『平和な世界』。勇者よ。俺は

お前に、俺の全てを託そう」

マイア

「尚、この予告は本編とは全く関係がないので、」
「了承下さい」

真・魔王が現れた第二話（前書き）

どうしてこうなったのか、自分でも不思議です。

真・魔王が現れた第二話

「んー。しっかし、本当にこの城は人が少なえなあ」

昼。中庭でマイアと雑談していると、勇者シャイナが歩いてきた。

「そもそも人間達の城にいる召し使いが多すぎるんです。私達の王は自分のことは自分でするので、私達の仕事は掃除と食事の用意だけですから、少なくとも何とかなるのです」

「というか、魔法で大体の事は出来るから人が多いと金の無駄にしかならないだけだ。」

「まあそりゃ魔族はね。人間より能力は高いし魔法も上手いからそうだろうけど、私達人間はそうもいかないのさ」

「……シャイナは魔法が上手いじゃないか。城だつてすぐ直したしな」

「ハッ、私を誰だと思ってるんだ？ 世界を救う勇者様だぜ？」

「ふ、そうだったな……」

「と、それよりも聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「何だ？」

「いや、城ん中は大体見終わったんだけどさ」

「魔王様の家で何を勝手に……」

呆れた様子 of マイア。だが、そんなマイアには目もくれずにシャイナは喋る。

「どーしてもどこにあんのかわかんない部屋があつてさー」

「……何処だ？ 案内してやる」

「お、サンキユ。行きたいのは宝物庫」

ゾクッ

シャイナが宝物庫と言つた瞬間、恐ろしいほどの殺気が俺達を襲う。

「なん、だ、けど、さ……」

シャイナも気付いたのか、声が小さくなっていく。

この殺気、俺達の戦いの時の比べものにならないほどに濃い。俺は横を見る。

「……………」

そこには、この世の物とは思えないほど黒いオーラを纏つたマイアがいた。

「マ、マイア……?」

「はい、なんですか？ 魔王様」

くっ……、凄まじいまでのプレッシャーに押し潰されそうだと見ると、シャイナも苦しそうにしている。

……まさか、マイアこそが魔王の次に現れると言われている、裏ボスなのか!?

「何をそんなに怒っているんだ？ その、俺が悪いことをしたなら言ってくれないか？」

「いえ。私は魔王様に怒っているわけではありません。分も弁えないうこそ泥にキれているのです」

「ひっ……!?!」

馬鹿な。あのシャイナが怯えている……？ まさか、俺が感じている殺気は漏れだしたほんの一部にしか過ぎないのか!?

とりあえず、マイアはシャイナが宝物庫に近づくのを嫌がっていることはわかる。

「……さて、我が主の財産を盗ろうとすることこそ泥に、どんな罰を与えましょうか……」

フッフ……、と恐ろしい笑顔を浮かべるマイア。

シャイナは魔王と対峙したかのように顔面蒼白だ。だが、流石は勇者と言うべきか。一般人なら腰を抜かしているであろう殺気の中、後退りもせず地に足をつけていた。しかし、それだけだ。シャイナに戦意は無く、意地と執念でマイアと向かい合っているに過ぎない。

ならば、シャイナの友として。マイアの主として。俺が取るべき行動は一つのみだ。

「魔王様……?」

マイアとシャイナの間に入り込む。一瞬、シャイナに向かっていた膨大な殺気が俺の肌を刺すが、魔王としての誇りが怯えることを否定した。

「ア、アウルウ……」

シャイナが弱々しい声で俺を呼ぶ。

待たせたな。だが、安心しろ。今、お前の友が助けに来た。

「魔王様、退いてください。そここそ泥を今から潰すのです。汚れてしまいますよ……?」

「……マイア。悪いが、それは出来ない」

「何故ですか? それは勇者。魔王様の敵です。そして、魔王様の敵は私の敵なのです」

「違う! 勇者は……、シャイナは俺の友だ!」

「アウル……」

「魔王様……。元来、魔王と勇者は天敵同士。友になどなれるはずがありません」

「そうかもしれない……。たしかに、俺達は戦った。けど、そこには憎しみなんてなかった。……ただ、宿命があっただけなんだ。……俺達は戦いの中で分かり合い、握手を交わした。勇者と魔王とし

てじゃない。……シャイナと、アウルとして、友情を誓い合ったんだ　！」

これが俺の思いの全てだ。マイアに届くかはわからない。だけど、これが今の俺が言える全てだ。

「アウル、お前……」

「ふう」

マイアから発せられていた殺気が霧散する。

「まったく。仕方の無い人ですね、我が主様は」

思いは　届いた。

「まだ認めただけではありませんが……まあ、滞在くらいは許しましょう」

「マイア……ありがとう」

やはりマイアは、最高のメイドだ。

「魔王様。最高の猫又メイド長、ですよ」

「ふ、そうだったな」

俺とマイアは微笑み合いながら、城へと入っていく。

「え？ 私、助けられた一般人的な感じで終わり？　勇者なのに空

「気がよ？ ふざけんな！」

後には、完全に見物人と化していた勇者が残されたのみだった。

真・魔王が現れた第二話（後書き）

シャイナ

「よう。今回はあまり活躍できなかった勇者のシャイナだ」

アウル

「その友、アウルだ」

シャイナ

「次回予告は私が言うよ。アウルは締めをよろしくな」

アウル

「まかせろ」

シャイナ

「次回。遂に世界は勇者の物に！ 世界中の愚民どもは勇者シャイナを崇め、奉り、尊敬する、勇者シャイナの為だけに生きる奴隷となった！ 世界八カクモ美シク第三話『世界は私の物！』。ひれ伏せ！ 愚民ども！」

アウル

「シャイナの名を騙る偽者め……！ 待っているシャイナ！ 今、俺が救いに行く！」

シャイナ

「……お前、本当に魔王か？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1731z/>

世界八カクモ美シク

2011年12月8日01時53分発行